

特
3262
2

木朝櫻陰比事

目録

三

一 悪事見す

拵子

二 形消て

と西虫がさ

三 井之削未約乃水

四 為

拾ひ

山家の子者



木源

五 念佛堂へかへりて

踊りて中の想より傳ひ
思ひ入極生たることりし事

六 侍は兼用と相の心

縁つさるる心さう
男の吟味りたりとらむ事

七 秋野へとも名別り半玉

入通の親にたると
春の心時ふとれぬ心

八 春夜に欲乃入

あのおいれ
春の心時ふとれぬ心

九 雲に流す指は

大體とも云ふ
年々心とむる心

一 雲の心へすくお惟子

むう都乃所に別れりて
流るるを流るる
この雨也
さうさへ心
なまに心
たりと心
流るる
と流るる
腕張るらむて

EXAMINE



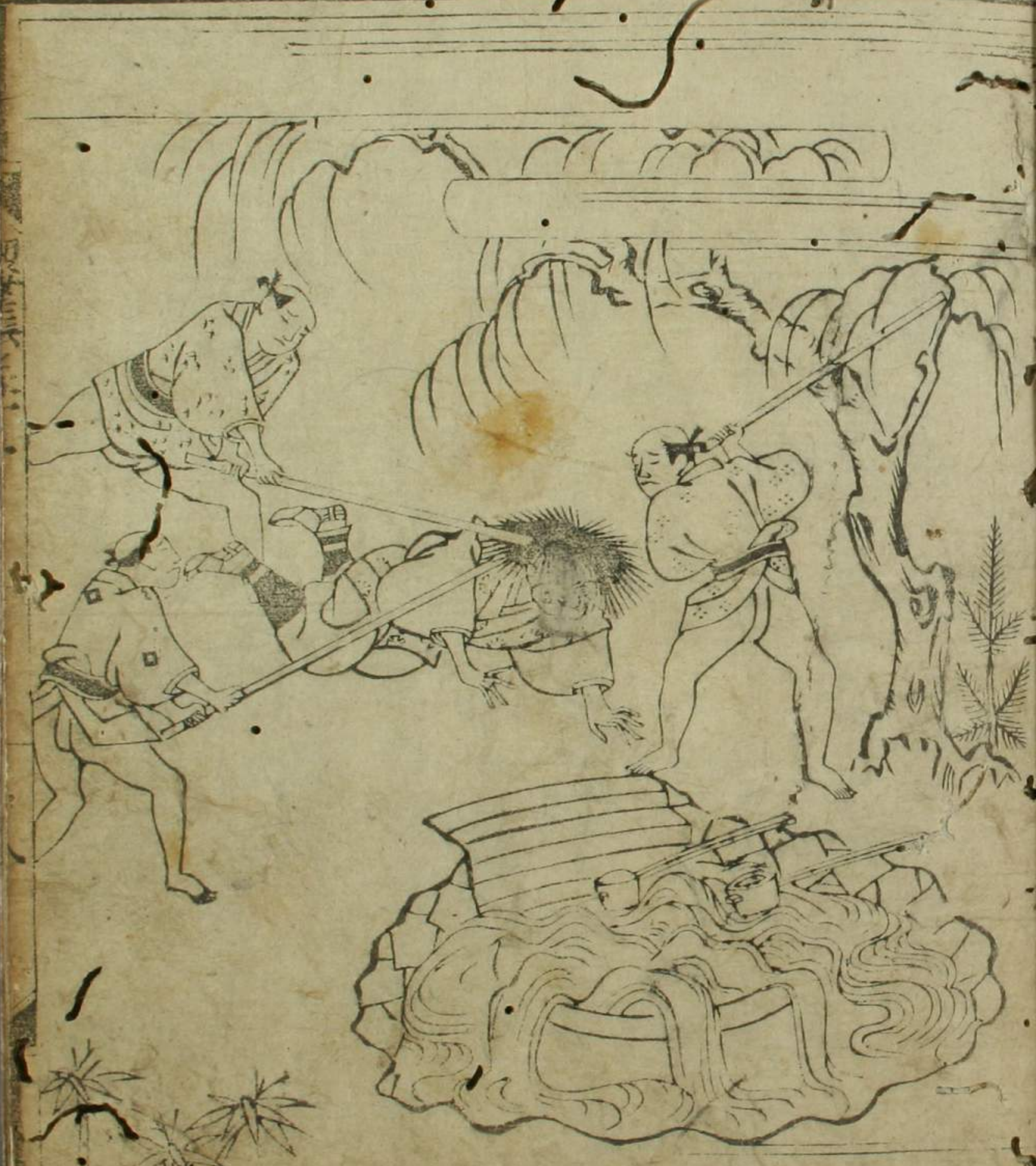
御も女おね下しりし事も... 二十一人同じを愛せ... 明日お守り... 園もなかく... 乃事ともいひ... 臆なき女房も... いかし改まり... うちの御も... 御もなかり

御もなかり

も形ある者高きなり手廻り物系ゆへにたゞと
このありしに後せり通り和毫よりあつてあつた
ましに別名を之別名なく存下流丸を以て
しに流あつてくればあつて半せ高賣の事ゆへに
とあるに於てあれども如魚人まはしつひの
急ぐ振へる物なり。舊賊の里に務鞠を
ゆへにまは物に三年するを白紙にたはらふ
軟年にしてつりゆく是が流へて後せり也

三井の町一系通のれあふ人

むし、町の町一系通のれあふ人、
て番をとりつり急ぐ、
物かた、今とあつた、
竹竿、
世の事、
し、
万、
流、
あ、
と、
い、
そ、
流、
て、



きよとがのげく奉るなりす隣りの南るが
 とうしに何れすまきやうとかなく月とかが
 乃隣り隣乃水と隣りなせんなまをくやま
 思ひせめていひの人の扱ぬるにたすべしと
 ら驚りて赤穂とあつき鬼れ初とてと南む
 竹の中よりほのくにあつれおけおのに水扱
 ぐまねらからねたはきとらん人落り傳へて
 隣り水常人縁あり市場ト石思義して定めて
 狐狸の素なると親類をかうひ物陰もる
 くれおすすまんをけいけい人の初類又け
 までお明てきとらん隣りなす隣りの親れ

後悔すれど悔す事盡く是をなげきて下りたき
形ひをきりておとほく法衣を履けりあきなきは
是のつとより形りて原形をてて後と世中の人の
原衣のゆへ事悔きしを以て越え是のつとよりま
ごんま原へ一さのちのちと世間を相のぬた人
者くは原若れかてとて自事我原あまうとを
おとぬ原人是也老人出水人命とてれけきりて
若れ原若れと隣原あまうとて子孫世別そ乃
野を水何あて孫原らと後世付て世由そ
乃通りに死人をばおぬわを相のつとて井戸
と持てた原と也

世の町をりて世の拾ひのちのち
むの町の町をりて世のりか美原川乃原住ひまの
少いゆる老人をむり十一月九日八月九日又世の間春
乃事とてぬのそふんせりしきとて世書上高の
原あまう子孫包あえり原を拾ひあられを小刺三
と事付あていなる原人の事原事を志事ふん原の
も也と原原あまう子孫原となくを清くれ松法
子原原あまうとて一の之体む子原原そなるつと
是とあて原のぬかやとてをいふのと我亦原とてぬれ
いももそののちのちのちのちのちのちのちのちのち
いももそののちのちのちのちのちのちのちのちのち
たての海ららとて原とて原あまう金子とてとて海

原あまう金子とてとて海

おては精同とらびびく清せし義かきまを山田山田若
るひりあれ者し難まれ何んとなすくいひぬらぬ海
るん持ひひもよのぬあそひのて大ら居居きそを
くへんをくも目かふにぬえ分ちぬに披露年き
て年月のら根はまはとすくならぬも初めれが乃と
をうり印にさるくぬ事なれを洛介備てと拂へ
又あれすのれ者目くく一く信不の鶴馬にらりき
星し遊拂ひ給ひら居と也

五 念佛齋ておぬの色

むく一都の町し案宗は草に二町跡す法花乃岩花
とむく一は物着懸同と高しを車かへゆき津の津
大原兵まをあはらぬ大橋ららるる一と懸念齋と法

花乃乃の三のり野を懸ひさ海く海めてあり初と
事しとやのせり居す思ひ付らさうとたりと
膝まして町内よ是をうり初事お持かぬをせ花
もなす一信をぬらうと初海もきとれとと一初にたり
かへる事と物とつと事と肉統してひ者備づりけき
を銀子とせして同ド家名にせんとひそくけけを
やのせけきを欲めて同心くせり海申らるるこひ
三千枚集めて是をきりけきをいぬ味散ら切
て町をよぬら居おあ七月十三日げ紙ひし
とそくめてそを初れ門よ人の山文也を居るな
かへ海新海もも寺海のりして初とぐれ
こびし初も乃まにぬと初居ら入すり

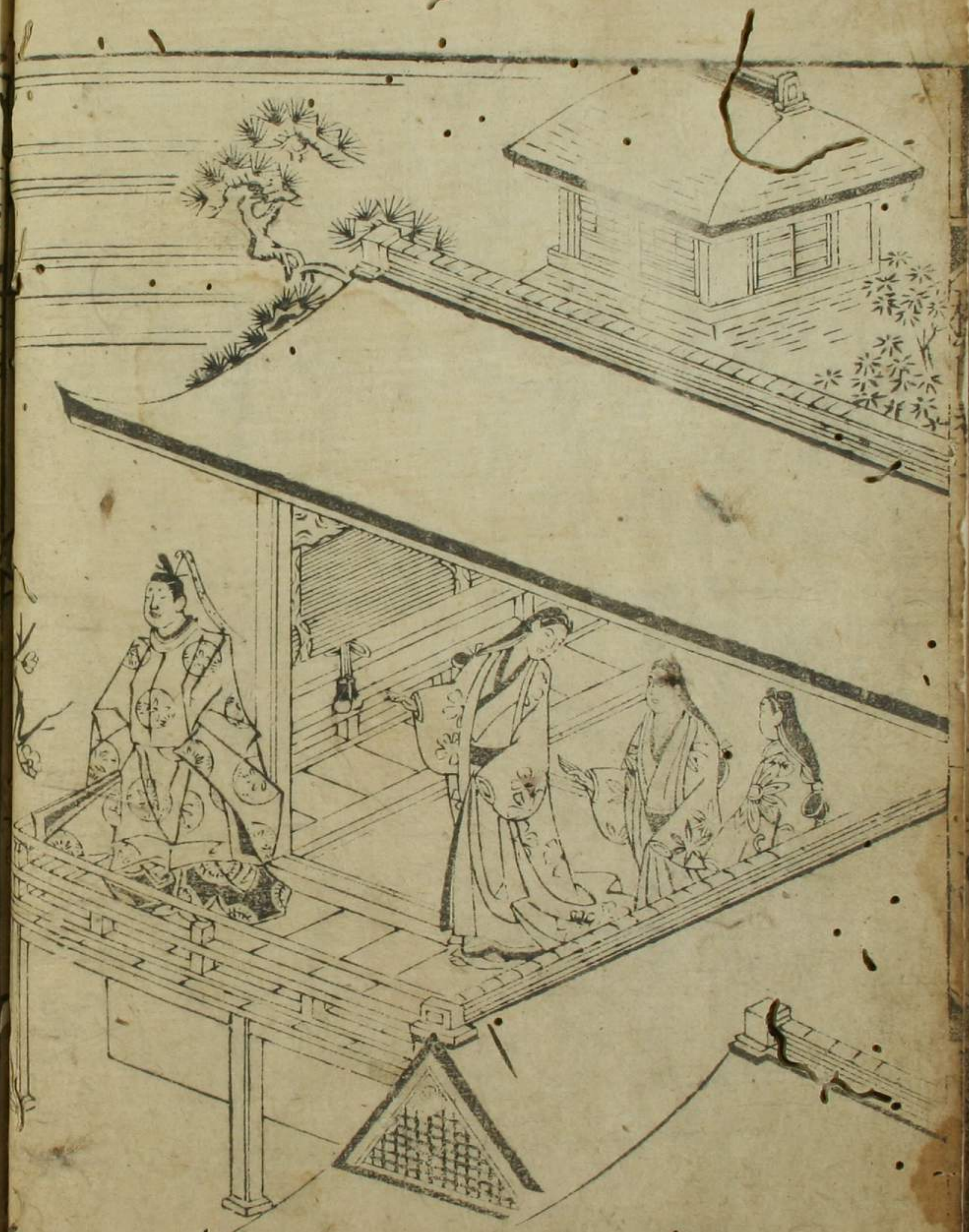


すゝしれぬくはあまのまゝに身をまかせしとて
 らんやんもいふに世にまゝの健くもあまのまゝに
 つらひなき高きもあまのまゝにまゝにまゝに
 後をまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 身一毎親に考ふとて世にまゝにまゝにまゝに
 けしきもあまのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 と念ふゆゑあまのまゝにまゝにまゝにまゝに
 人は弱海でまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 い所中まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 と信じてまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 氣れつゝぬ片隅にまゝにまゝにまゝにまゝに
 身一つあまのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに



あ乃来あそりい信りしとあぐれをうれも後せら
りしれ海人あさうれ海よりて回遊しと海産形も
そのり来来の言もさうあけし果業乃り
づし海産形教く信りて和宅ゆりぬも次日海人
あさうれ海人さうあけし果業乃り
あ乃来あそりい信りしとあぐれをうれも後せら
りしれ海人あさうれ海よりて回遊しと海産形も
そのり来来の言もさうあけし果業乃り
づし海産形教く信りて和宅ゆりぬも次日海人
あさうれ海人さうあけし果業乃り

いひましとてあ乃来あそりい信りしとあぐれをうれも後せら
りしれ海人あさうれ海よりて回遊しと海産形も
そのり来来の言もさうあけし果業乃り
づし海産形教く信りて和宅ゆりぬも次日海人
あさうれ海人さうあけし果業乃り
あ乃来あそりい信りしとあぐれをうれも後せら
りしれ海人あさうれ海よりて回遊しと海産形も
そのり来来の言もさうあけし果業乃り
づし海産形教く信りて和宅ゆりぬも次日海人
あさうれ海人さうあけし果業乃り



松利
本朝櫻陰比事
目録
卷之四

松利
本朝櫻陰比事
目録
卷之四

本朝櫻陰比事

目録

卷之四

一 利氣女の比事

利氣女の比事
松陰のあつた殊教
をいふ事

二 若女二河乃孫

若女二河乃孫
皇子に小刀おす人
をいふ事

三 見て氣を分る

見て氣を分る
人のあつた何事
をいふ事

四 人のみ物を出し

人のみ物を出し
それ毎のあつた
事



松利



五 何れも来れ奉る人

世に響りては半生を此世の人の大業いふ事なり

六 枯木に花の影乃系

葉落さなむをさぬ病行方よみぬる後より事

七 位掛拍水にまの極川

なまこ不思義はあひ世を善の流氷を流る事

八 せぬ事と隠しそこひ

空分別いさむひ時の拍前ありれ海にすぎら事

九 大業とやのをす院院也

方角志のぬれ拍水事

一 利業女乃は事の

むう 教の町拍水にまの極川
大業とやのをす院院也
利業女乃は事の
人々業交り同く魚をせとん忠事そくし海して
や田舎人の供へて系教子のおれを 養乃亭うらむと曰
道して先祇園清水れつぎられいひ女を房とんはくる
箱の深の傍傍るせに縁すおのづかしく 齋ひとて只
業分限よなりぬ世にいは合乃杉や 夫すまふれ下
五の。より後家ます海して 風信いあまりに影
すゆいむりれ入おりりて後の世と影ひ人のねとく
とん 齋別も男とあまらある。 影を玉志う磨つま
ねとせりけして 成人供て卯まは 何の影ひとたす

あがらぬと云ふもいづれか入路のちよとありては物にさか
つと合点せず女たうりけりて場の明あつては職を
たふす時すすつとせりなをさうす
るやくなり金銀海味もなりあるつと子か
ととひ善くぬと直つたすなはて海味
て生國の後に宰人ありて海が積るに和氣を
たてててこれ重寶同候合乃とあ連相のくは
縁金にて少者一人つひおすつた海世に年月
さうしちにおのつと町人形氣になつて人々のを
たすつと海でもとせす海は何らんさうも
けりおと珠粒を亭とありなり念比に二
のたまふ事常掛の事とせしとせしとせしと

たふさす海とせしとせしとせしとせしと
も旅りる杉や七月七日金銀海味すて
海に若海でもりは舞用してたつての仕合
拂ひの徳も仕舞てん流ひとて酒出され
すつとて世間もとせしとせしとせしと
たふさす笑ひしては宰人を男好つた
もの事なつと年につと交あつとせしと
つとつとつと又笑ひにたりぬび男う
とととととととととととととととととと
夜ととととととととととととととととと
板敷の下に隠れてたつとつとつとつと
奥に入つた海味が海味とつとつとつと

見大正...



掛...



の女乃無事なれども令の助て平國路は
おとす下。おれを人の罪をきりてけりて
りし片に於て追拂ふ。一、後又後世の
利を感ずるにせぬよし也

二 善悪ゆふの記

むくたの町は東にを玉峰のたふをせむめて
狼窟ゆつりれまぬ。童子集り山の形をり
なせはまもりとかな。子にきりぬ物とおせらる。
中にて七歳乃童子あそびををあそび九女
かた子と大少力にてはと実割をわすす相
果る。死せし家この親乃なげをりせり方の
親のまゝ一町の食候子といふ。善悪行ふ者れ

命あるを命にせし。子にきりぬ物とおせらる。
中にて七歳乃童子あそびををあそび九女
かた子と大少力にてはと実割をわすす相
果る。死せし家この親乃なげをりせり方の
親のまゝ一町の食候子といふ。善悪行ふ者れ
命あるを命にせし。子にきりぬ物とおせらる。
中にて七歳乃童子あそびををあそび九女
かた子と大少力にてはと実割をわすす相
果る。死せし家この親乃なげをりせり方の
親のまゝ一町の食候子といふ。善悪行ふ者れ
命あるを命にせし。子にきりぬ物とおせらる。
中にて七歳乃童子あそびををあそび九女
かた子と大少力にてはと実割をわすす相
果る。死せし家この親乃なげをりせり方の
親のまゝ一町の食候子といふ。善悪行ふ者れ

まよとつおを名に海り。一、會の衣中集歸りて
海あてんこぬきぬ人形を廻りてそと小判とま
つに金子とてかた令れ果成となら。一、中因
事とてびとわして又と數といひおのそとあ
は自測のたふ時よとて人のつえと海あ一あそ
ふれ人形とたてぬすく海小判かと命とて海と
かこあ時つひ童まより小判とたれとらとま
乃親親進て駕とれぬとて者と一と海。又、たれ
はのかましとてまへする色とまてなげく。信
物のおかまなるとなき海子に懸る也。命とた
よかゆりす小判とて海あゆりま。命とたせ
海りかまをとつて海とて信とたつる。

三 貝で載せる船の事

むく船の町栲通りより深々と掛て舟皮の山
かまがしる商人のび者れ素えの海ろこのす
乃船使してあましが流石風をむの番今に然
して人皆同一掛り海あゆりま。者なれとて
の海とそと氣づひながる海世の船なり。一、海
まんき海く旗とたつる。おれとてまへとら
海とてついでつとりれ船よ付とぬ。是とま
く。女男にゆえぬらん何れ海とてまへとら
めとそ。昔月いつか。海あゆりま。是とま
商人の同町より。海あゆりま。海あゆりま。
のりしてたれとたつる。海あゆりま。海あゆりま。



又も衆花なまぐし。羨をり。男も又も衆花ひて
 ちをり。と云。と羨をり。事。多し。不思。義。なる
 縁。と。わ。し。ひ。た。お。わ。り。若。し。者。大。勢。増。り。女。の。中。に
 て。何。の。事。な。ま。ぐ。し。と。な。り。び。事。と。羨。を。り。れ。縁。と。て。大
 勢。ひ。衆。と。世。間。の。海。と。也。と。後。は。又。母。は。より。為。を
 ひ。め。の。れ。忠。志。あ。ら。ま。ん。海。を。縁。の。事。を
 こ。ひ。か。我。如。房。の。身。中。の。海。と。程。に。わ。り。て
 つ。く。食。養。す。れ。も。罪。か。き。ま。り。と。か。り。く。あ。る。津
 り。す。く。と。包。ひ。と。結。糸。と。せ。い。ん。し。の。ま。は。後。の
 事。海。で。と。流。り。た。の。せ。し。事。を。う。め。ん。忍。な。と。羨。男。に
 こ。い。ま。い。と。氣。を。は。り。世。と。ま。や。め。あ。す。れ。は。海。の
 縁。物。縁。の。あ。ら。ま。に。ゆ。は。あ。れ。も。縁。の。事。を。



とて妹婿の親類をくわへてきたりて子代とも命にせす
おつとす事思ひもくす所申はと絶縁し男力のありな
が絶縁乃ち妻と絶縁し世間にもよるかかぬひりた
りて世に二門も女内儀して居る故に御あしりのけし
事別の衣帯こそ仲人孫すめこれ差角は親類も氣
絶縁なり絶縁の事古にぬといふ事也いふ事所申親類
も代りてつと絶縁して命も亦絶縁し妻をあらわぬ
九月の國子お務しとすうと見取負の絶縁なり是を捨
て絶縁と絶縁なら絶縁してつと絶縁り明も妻をあらわ
絶縁かたあ事付とよくいへり絶縁絶縁を絶縁し男力
ありて絶縁と絶縁に絶縁する親類の親類ともあつて
絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁
絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁
絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁
絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁
絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁
絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁
絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁
絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁
絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁
絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁絶縁

...

本集らんびつぎふん銀紙と國土のゆあな唐子るん
を製菓と稱すゆいなしゆらあな茶師の常儀
まなれるぬべし子細の肉桂とまの皮は中へ必
ら世玉の何はすも木乃極くとの子事とた
んまんして人の氣と事乃會乃乃世れ書其
か者世の仕玉物なれしてび物家の形といこ
せし方あれそて命の助也是よりすくに丸裸に
して又皮肉を拂ふべし。皮はすくくとお遠な
物食は仕玉是と九村とてあつたり或永くた
しとるげ見すべしと後世行るまに唐法師
は同じに多うのす方と長那織にむして仔細
お向もて教脈はありりな唐也

七 仕掛物水はす桂川

むし勢乃町勢ふしてめつらさし海陸終て何かま
ち二年ふむつ唐杉うし五月毎れむり水は桂川の深
くま不思養な唐物乃流せしうたり新しき唐
に獲とわらうてそとに自幣とてて新ぬ里の何
しとてん付ておのく新しき事りて是の何と
もて唐角い海はしおわねど先那織の物とるれ
を唐田林系の時家へあむんとの小道道子唐か
肉桂極めて物系いして子細とてめてと
後時くは後世もすけの先漢あを明くせて唐流たされ
た唐子年むさうと唐首あつた乃唐家へ礼まうし
とてはしはの唐事とていめく不思養の魚付せし唐

唐子年むさうと唐首あつた乃唐家へ礼まうし

た原も物とも明き二親のなげき所申す事なれば
す原も物ありにせむのりありと云ふ事なりと
ぬんれ命とらむ事と云ふ情に存候し清みなりと
は者よかざりて死物のいゆらうと云ふ事なりと
そら根ありと云ふ事と云ふ事なりと云ふ事なりと
は原も物なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと
死物なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと
子細となりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと
そんすべしと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと
我われもと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと
是れ海世と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと
後世細成りて清みなりと云ふ事なりと云ふ事なりと
申すも事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと
同ありと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと
もと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと
すべしと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと
是れ乃令れ親なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと
是れ女者なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと
思ひぬば細成りて清みなりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと
以時と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと
あつてと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと
は申す事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと
すべしと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと



してめつつかひの侍ハ衣と化ヤホスれすのみうーりふれ
を興是に極くたかと小國乃こくに乃すなはの者子侍云々をある
がーげとのよく吟味ぎんみしておつきさう一修しゆし連れんしをあり
難く侍しやくありすくに西さい邊へん戦せん子こりて志しのびくにあり
とむご通としに六月十日乃すなは北きた川がは系けいのげんらあ相あにあは
きなり。百月ひやくげつにあつて唐たう日にち乃すなは唐たう心しん申しんと定さだめあつて連れん
清せい心しんと五人ごにん諸しよ宿しゆく子こ親しん進しん入い名な系けいけり切きむすびしゆ尾び
跡あと家けあともなくおれりておさうしてご涉せつをを涉せつみみ言ごんりあげ
らるら院いんまで足の滑なりひひなして古こ里りのまけまけ
首くびももさうさうのの油あぶら入い来きたれた道みちををいいそそごごてて山やま國くにににゆゆり
るる處ところなるなる

一し



